九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「書く」ための効果的な文法指導開発へ向けた基礎研究 : 中等国語科教育における形式名詞「こと」の取り扱いの観点から

河野, 亜希子

https://doi.org/10.15017/1807128

出版情報：九州大学, 2016, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

（様式６－２）

氏　　名	河野　亜希子
論　文　名	「書く」ための効果的な文法指導開発へ向けた基礎研究 ―中等国語科教育における形式名詞「こと」の取り扱いの観点から―
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教　授　　松村　瑞子 副　査　　九州大学　　教　授　　松永　典子 副　査　　九州大学　　教　授　　山村　ひろみ 副　査　　九州大学　　准教授　　辻野　裕紀 副　査　　国士舘大学　　教　授　　山室　和也

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、形式名詞「こと」を一事例とし、従来の学校文法のあり方の再検討及びその指導法を新たに提示するものである。学校文法については、長きにわたり国語科内外から議論された分野でありながら、具体的な打開策となるものが示されていないのが現状である。そもそも文法を何のために学習するのかという意識は生徒だけではなく教師側にも依然不明瞭なままである。この点を踏まえ、本論文では生徒の書き言葉データの特徴を分析し、文法指導に盛り込むべき項目を明らかにすることで、これまでの暗記中心の文法学習から「書く」ための文法学習への転換の可能性を示唆した。以下、本論文を構成する各章の要旨を示していく。

序章では、本論文で展開する研究の背景・動機及び視点を明示し、本論文の方向性を示した。

本論文は序章・終章及び第１章から第７章で構成される。中学校・高等学校の生徒（以下、生徒）の書き言葉の実態を分析し、その特徴を明らかにすることで、現行の文法指導のあり方について再検討したものである。長きに渡り、その方法・提示等が批判にさらされてきた学校文法であるが、特に「書く」という点において活かされていないという現状を踏まえ、生徒の書き言葉の実態からその指導法を提示した。これは、従来の学校文法の再検討のみにとどまらず、暗記中心の文法教育から「書く」ための文法教育への転換の可能性を示唆するものである。また、本研究で提示した指導法や文法指導に付加すべき視点を援用することで、生徒の書く力の適正さ（文法的正しさ）だけではなく、文脈や場面に応じた表現能力の育成に繋がることが期待される。

第１章では、学校教育の変遷と先行研究の概観及び本研究の課題について述べた。学校教育の変遷を「国語科教育の変遷と現状」、「文法教育の変遷と現状及びその位置づけ」から捉えた。また、先行研究を、「多言語・多文化下での国語教育に関する研究」、「学校文法の問題を取り上げた研究」、「文法と作文・表現指導に関する研究」、「個別の表現に焦点をあてた研究」、「形式名詞「こと」の習得に関する研究」に分けた上で概観し問題点を明らかにした。さらに、これらを踏まえ、本研究の課題を具体的に示した。

第２章では、研究課題に付随する文法学習・指導における生徒・教員の意識を明らかにした。また、教科書やコーパス等の文献調査も行い、実際に中学校で使用されている教科書での提示や指導法を見ていった。各調査からは、生徒も教員も文法学習（指導）に対してどのように向き合うべきかという点で共通した意識を持っていること、形式名詞「こと」は校種が上がるごとに教科書での出現数が増加していることを示した。その上で、文法学習・指導に関する意識と教科書提示等との

相関性についても言及した。

第 3 章では、形式名詞「こと」の一般的な分析について述べた。まず、先行研究等による形式名詞「こと」の類型を示し、その後、学校文法の「文の成分」に基づいた「こと」を含む文の類型を示した。さらに、述部「ことだ」を引き起こす文の類型についても観察した。

第 4 章は、作文調査による形式名詞「こと」の使用実態について述べた。まず、本研究で採用した補充作文及び課題作文について概略を述べ、各調査で得られたデータを示した。「形式名詞「こと」の使用の実態」では、生徒の補充作文に見る実態から発達段階と語彙の関係を捉え、さらに課題作文に見る実態から、書き言葉の中で形式名詞「こと」がどのように使用されているのかを捉えた。さらに、課題作文に見られた形式名詞「こと」の使用実態に基づく分析を行った。ここでの分析はいわゆる教科書等の分類とは別に、課題作文における文章表現で見られた傾向や誤用が中心となっている。その上で、誤用分析、容認度が異なる文の分析を行い、誤用の原因等について考察した。

第 5 章は、第 4 章までの分析をもとに学校文法における形式名詞の取り扱いの妥当性をはかった。学校文法における形式名詞の取り扱いについて、教科書提示の実態及び文脈・場面による容認度の違いから再検討した結果、学校文法における形式名詞の提示が、まさに形式的なものにすぎず、文を書くことにおいては全く活かされていないことが示唆された。また、文脈・場面によってほぼ同義と捉えられる形式名詞類であっても適切なものとそうでないものがあること、使用したほうが望ましいものと使わなくても問題ないものがあることについて論じた。

第 6 章では、形式名詞の効果的な指導法を示した。本研究で明らかになった形式名詞の取り扱いをめぐる諸問題や現状から、その効果的な指導法について誤用分析・容認度の観点から提示し、具体的な指導手順についても一例を挙げた。

第 7 章では、学校文法に求められる視点とその可能性について言及する。これまでの分析から学校文法全般に求められる視点について、主に「話し言葉と書き言葉の峻別」にあると結論付けた。また、学校文法の可能性について、国語科教育における作文・論文指導との連携、日本語教育との連携の観点から言及した。

終章では、本研究を振り返り、まとめた上で、今後の課題を提示した。

本論文の学術的意義は、形式名詞「こと」を事例として、従来の学校文法の在り方を再検討し新たな指導法を提示した点にある。また、この手法は、作文・論文指導、さらには日本語教育の場での援用も可能であり、文法学習が国語科教育の中で孤立したものであるという従来の問題の解消に資することができるというのも本研究の意義の一つである。

以上から、論文調査委員会は全員一致で、本論文が地球社会統合科学府の博士学位（学術）論文として十分な水準にあると判断した。